

編集後記

もう秋も終わろうとしている。美しく色づいた葉も先を争うように落ちていく。この季節の休日は、私にとってこの上もなく憂鬱である。我が家は板橋区で最も古い公園の一つである、常盤台公園に接して建っている。購入時は、二階の居間から広々とした公園が一望できて、まるで我が家の庭のように毎日楽しめると後先考えずに決めてしまった。当に春は満開の桜を毎日眺めながら、朝食をとる贅沢にありつけた。夏は我が家の背景にはうっそうとした緑が青々と天に向かい、ちっぽけな家を陽炎の中に素敵に映し出す。ところが秋が深まるとことごとく落葉樹である公園の木々は、我が家の猫の額程の庭、ガレージの屋根、前の道路に落ち葉の山を築く。区からの援助はなにもないまま、道路の落ち葉を毎日掃き続けなければならない。休日の朝はまとめて家の周囲を掃くが、一度雨が降ると水をたっぷり含んだ落ち葉ほど始末に終えないものはない。今年は落ち葉対策にと、米国製の携帯送風機(米国の公園や日本でもゴルフ場でよく見かけるやつ)を購入し意気揚揚と立ち向かった。流石、米国製の器械は物凄い騒音とともにガレージの屋根に降り積もった落ち葉を、埃を撒き散らしながら一掃した。勿論、私は帽子、マスク、ゴーグルを身に付けないと埃まみれになってしまう。気を良くした私は家と塀の間の狭い通路に向けて送風した。落ち葉は移動するどころか狭い空間を舞い上がってさらに飛散するといった無残な結果に終わった。そんな器械を買ったからだと家内に責められることしきりで、昔ながらの竹箒を持ち出す始末。こうして落ち葉との格闘が終わる頃、年の瀬がやってくる。

昨秋から毎月末、どさっと査読が舞い降りて来るようになった。その多くは症例報告である。自分では見たことも聞いた事も無いような報告を、ときには興味深くときには飽き飽きしながら読み進める。そんな折、私が国立がんセンター病理部で研修していた当時の、下里幸雄部長の言葉をよく思い出す。「なあ昌彦。症例報告ってのは大事なんだぞ。医者なんて一生の間に診られる患者の数は限られてる。症例報告を読むことは臨床経験を一つ積む事だ。書くほうは珍しい症例から真実を掘り起こせるチャンス、その疾患については世界一の専門家になれるチャンスが得られる。」下里先生は「がんセンターの鬼軍曹」と異名を取るそれはそれは厳しい先生であった。

落ち葉との闘いに疲れた身体に鞭打って、休日の夜私は査読三昧にひたっている。